

# 類義語「ついに」「とうとう」の相違について

## —新聞記事における使用頻度から—

趙恩英

### 1. 目的

副詞の「ついに」「とうとう」は、「ある事態の実現に長い時間がかかる」<sup>1</sup>という共通の特徴を持つ類義語<sup>2</sup>とされている。この副詞は互いに置き換えが可能な語として取り扱われてきた。これまでの「ついに」「とうとう」に関する研究は、個々の語の意味を追求するものが多く、大量のデータを用いて量的に、意味・用法の違いについて分析する研究はあまりなされていなかった。

これまでの類義語の研究は、その類義語の相違点を、限られた例文の提示と内省の判断に委ねてきたようである。意味の面だけからの説明や数少ない用例だけの解釈では、類義語の相違を明らかにすることは難しいと考えられる。

そこで、本稿では、類義語である「ついに」「とうとう」の差を明らかにするため、先行研究ではあまり扱われていなかった新聞というジャンルを用いて構文的な観点から量的に検討していくことを目的とする。

### 2. 先行研究

大里 (1986) は、小説<sup>3</sup>を資料として「やっと」「ようやく」「ついに」「とうとう」の分析を行い、「～ない」などの否定形式を伴った文には、「ついに」が現出するのが普通で、「～だろう」と結び付くのも「ついに」であるとしている。そして、「ついに」は<瞬間>、「とうとう」は<過程>に焦点があると指摘している。

池田 (2000) は、「ついに」「とうとう」は「～てしまう」と共起しやすいと指摘した大里 (1986) の先行研究を取り上げ、「ついに」「とうとう」のいずれが「～てしま

---

1 「ヤット・ヨウヤク・ツイニ・トウトウ」『ことばの意味3 辞書に書いてないこと』(長嶋善郎 1982 : p. 171)

2 類義語：語と語のあいだで、意味のかなりの部分が共通するとき、それらは類義関係にあるといい、互いに類義語と呼ぶ。(『新版日本語教育事典』2005 : p. 278)

3 資料として用いられている小説は、遠藤周作『沈黙』(新潮文庫)、『悲しみの歌』(新潮文庫)、『口笛をふく時』(講談社文庫)、三木 清『人生論ノート』(新潮文庫)、大岡昇平『俘虜記』(新潮文庫)である。

う」とより共起しやすいのかを、テキストデータ<sup>4</sup>を利用して検討し、「ついに」は8%、「とうとう」は25%という結果を出している。そして、「ついに」は「最後」の意味を強調はしているが、その気持ちよりも事実であり、モーダルな表現でありながら、命題と結びつきが強く、「とうとう」は、後悔の気持ちを強調し、話し手の気持ちより結びついた表現だと述べている。

李建華 (2000) は、アンケート調査で38例文をあげ、「ついに」「とうとう」の表現を当てはめた時、その表現が適切か不適切かを答えてもらった。その結果、「ついに」は実現した瞬間に重点が置かれており(結果重視)、「とうとう」は実現するまでの過程に重点が置かれている(過程重視)と指摘している。

ルチラ (2005) は、「やっと」「とうやく」「ついに」「とうとう」について、『新潮文庫の100冊(CD-ROM版)』をデータとして分析し、「ついに」は実現をそれに至る過程の結末・最終局面として描写しており、「とうとう」は実現または非実現を何らかの((非・)実現の)懸念の的中として表現するとしている。

劉・吉田 (2006) は、『外国人のための日本語例文・問題シリーズ8助動詞』からの用例を取り上げ、「とうとう」は「結局、最後に」の意味で、ある事柄が起きた後に、最終的結果が起きる時に用いられ、「ついに」は「おわりに、しまいに」と言う意味で、当初の期待がかなったり、心配や不安が実現したりする場合に用いられると指摘している。

石川 (2006) は、『プロジェクトX-挑戦者たち(メディアミックス版)』をデータとして分析を行い、「ついに」「とうとう」「ようやく」「やっと」の要因として、「時間の経過を意味として有すること」「事態の起動・実現に至るまでの経過に多大の労力・エネルギーが費やされたという意味を含む」ゆえに類義性を生じるとし、「ついに」「とうとう」が「する、した」と共起する時、基本的な被修飾動詞は、瞬間動詞だと指摘している。そして、否定表現は「ついに」「とうとう」と共起し、間投法で用いられる「カ(感慨)・「ノダ(詠嘆)・「ぞ(強意)との共起は、「とうとう・やっと」のほうが「ついに・ようやく」よりも、共起しやすく、話し手の気持ちなどの心的態度を表す傾向(主観性)が強いとしている。

山本 (2007) は、認知言語学的な観点で『山本五十六(上)(下)』を資料に分析をし、「ついに」は到達点を表す表現と共起するものが多く、「とうとう」は一個の出来事の

---

<sup>4</sup> 利用されているテキストデータは、『芥川全集第一巻～十三巻、第十五巻』(文芸春秋社)、『アレア』(1993年5月25日号 毎日新聞社)、『シナリオ「寅さん」シリーズ』である。

実現に至るまでの経緯との関係を表すものが多いとしている。

以上、取り上げた先行研究は、形式からのアプローチでも、意味からのアプローチでも、分析の対象である用例の数が少ない点、そして、小説を中心に分析がなされていることで偏りがあることに問題点があると思われる。先行研究の中、他の研究と比べ、量的な研究が行われたと思われるのは、池田 (2000)、石川 (2006)、山本 (2007) があるが、数値的に大量とは言えない<sup>5</sup>。

本稿は、研究方法としては、大量のデータを量的に調査する方法をとり、調査データはこれまで扱われたことがない「新聞」というジャンルを選ぶ。「新聞」での出現傾向の結果から、先行研究の結果を再検討し、形式的な面に注目をして「ついに」「とうとう」の用いられる構文的な特徴を明らかにしていく。大量のデータを見るのは、「単にある形式の有無を調べるのではなく、その頻度を定量的に知ることができ、それをテキスト全体あるいは類似の他の形式と比較して、相対的な頻度を知ることができる、(省略) 頻度ばかりではなく、分布のしかたにも偏りが見られることもある」(後藤 2003) ためであり、「ついに」「とうとう」が現れる文脈での特徴が見えやすいと思われるからである。

### 3 用例の抽出と分析の基準

#### 3-1. 用例の抽出

用例は、『CD-毎日新聞データ集』<sup>6</sup> (以下、『毎日』と称する) から、95~97年の3年分、総 114, 141, 941 語数<sup>7</sup> を利用し、新聞記事の種類の違いはせず、「ついに」「とうとう」が入っているすべての文を抽出した。最終的に、分析の用例として認定したのは、「ついに」が 1899 例、「とうとう」が 304 例であった。

プログラミング言語 Perl で用例を抽出する際の留意点は次の通りである。

(1) 「ついに」の場合、助詞 (ハ) がついている「ついには」<sup>8</sup> と、漢字で現われて

<sup>5</sup> 池田 (2000) の使った用例数は、「ついに」123 例、「とうとう」229 例、石川 (2006) の使ったデータは『プロジェクト X』(第 1 巻~26 巻) で、総計、約 6, 175, 488 字、新潮文庫 10 作品で総計、約 2, 171, 776 字であって抽出された用例数は「ついに」530 例、「とうとう」62 例である。山本 (2007) の使ったデータ数は、総語数、261, 427 語数で、抽出された用例数は「ついに」17 例、「とうとう」16 例である。

<sup>6</sup> 本研究の用例は、首都大学東京大学院人文科学研究科日本語教育学教室の長谷川守寿研究室所有の『CD-毎日新聞 95 年・96 年・97 年データ集 (毎日新聞社)』から抽出した。

<sup>7</sup> 95 年 : 34, 016, 751、96 年 : 38, 427, 209、97 年 : 41, 652, 981 語数である。「茶筌プログラム (フリーソフト)」で数えた。

<sup>8</sup> 「毎日」データから抽出した用例を見ると、「ついには」と「ついに」との間で、大きな

いる「遂に」「遂には」を抽出の対象とした。抽出された用例から、例(1)(2)のような54用例を分析の対象から除外した。

例(1) 先日、大統領の長男が強盗未遂に遭った。 (95年3月31日)

例(2) 信者がたいている香のきついにおいに混じり、「異様なにおいが漂い、不潔そのものだった」と話す。 (95年3月31日)

(2) 「とうとう」の場合、ひらがなだけを検索の対象とした。抽出の結果、例(3)のように、「とうとう」が「滔々」の意味などで使われている用例、59用例を分析の対象から除外した。

例(3) 原さんは五十年の重みをとうとうと語った。 (95年10月14日)

### 3-2. 分析の基準

小矢野(1982)は、副詞の意味記述について、統語的環境における共起制限の観点から意味記述をする必要があり、そのために検討すべきものを次のように述べている。

意味記述に際して、統語面と意味面とから、使用条件を明示的に記述すべきだと言わなければならない。[中略]副詞が文中で共起する場合、その文の述語の形式は、いくつかの種類に分け得る。最も単純で基本的な述語は「動詞、形容詞、名詞+だ」が終止形言い切りの形で使われる。続いて、事柄的世界の在り方として、ボイス及びアスペクトの表現としての、助動詞「(ら)れる」「(さ)せる」及び補助動詞「ている」「てしまう」「始める」「おわる」などが、動詞に付いて終止形言い切りの形で使われた表現形式の述語がある。

次いで、事柄的世界に関する話し手のとらえかたについての表現として、「その文で表現されるべきことがらに対する言語主体の認定」を表す肯定/否定表現、過去/非過去表現の述語と、「言語主体の態度」を表す意思表現と推量表現の述語が、副詞の共起制限の条件となる。 (小矢野 1982)

本稿は、先行研究の結果を、新聞データの用例から再検討をして、小矢野(1982)の考えにならって各副詞の統語的環境、つまり、述語との共起関係を見ていく。そし

---

差が出たのは、「てしまう」との共起であった。「ついには」の場合、16.2%、「ついに」の場合、2.7%であった。他の項目においては、「ついには」「ついに」との間に大きな差はあまり見られなかった。「てしまう」に関する数値の差についての考察は今後の課題にしたい。

て、文は大きく「会話文」「地の文」と分けられるため、この二つの文での「ついに」「とうとう」の出現を検討する。そして、ルチラ(2005)が、「ついに」の特徴として指摘した「名詞止め」との共起について検討する。抽出した用例の分析項目は、次の通りである。

- (1) 「ついに」「とうとう」と共起する述語の種類
- (2) 「ついに」「とうとう」と共起する述語のテンス
- (3) 「ついに」「とうとう」と共起するアスペクト
- (4) 「ついに」「とうとう」と共起するモダリティ
- (5) 終助詞・間投助詞との関係
- (6) 「会話文」「地の文」での「ついに」「とうとう」の出現傾向
- (7) 「名詞止め」の用法について

#### 4. 分析結果

##### 4-1. 「ついに」「とうとう」と共起する述語の種類

「ついに」「とうとう」と共起する述語の有無についてまとめたものが表(1)で、共起する述語の種類についてまとめたものが表(2)である。表(1)の「表示有」というのは、述語が表示されているものを意味し、「表示無」というのは、述語が表示されていないものを表す。例(4)が「表示有」、例(5)が「表示無」の例である。

表(1) 述語の有無

	ついに		とうとう	
	度数	比率	度数	比率
表示有	1642	86.5%	286	94.1%
表示無	257	13.5%	18	5.9%
合計	1899	100.0%	304	100.0%

表(2) 述語の種類

	ついに		とうとう	
	度数	比率	度数	比率
動詞	1624	98.9%	284	99.3%
名詞+だ	18	1.1%	2	0.7%
合計	1642	100.0%	286	100.0%

例(4) 家出や大統領選出馬表明と派手なパフォーマンスを見せていたペルーのフジモリ大統領夫人のスサーナ・ヒグチさん(44)がついに離婚訴訟を起こした。  
(95年1月5日)

例(5) 1人はついに未発見。  
(95年1月24日)

そして、「ついに」「とうとう」と共起する述語が表示されている「表示有」の場合、その述語の種類は、例(6)のような「動詞述語」、例(7)のような「名詞+だ」で、殆ど

の比率を占めているのは「動詞述語」である。

例(6) とうとうあきらめた。 (96年11月15日)

例(7) とうとうパンクだわ。 (95年5月27日)

述語の種類について、表(2)のように、「ついに」「とうとう」両方とも動詞述語が9割以上の比率を見せている。

この表(1)(2)から注目すべき点は、「ついに」「とうとう」の出現において、「ついに」の方が「とうとう」より、約6倍の多さで出現しているということであろう。これまでの先行研究で扱われていなかった、「新聞」というジャンルでは、「ついに」の方が「とうとう」より数多く使われていることが、今回の調査で分かった。

そして、共起する動詞についてまとめたのが、表(3)である。「ついに」「とうとう」、両方で出現頻度が一番高い動詞は、「なる」であり、次に高い比率を見せたのは「来る」であった。その後、「ついに」の場合、「超える」「する」「出る」「実現する」「至る」「果たす」順で、「とうとう」の場合は、「やる」「出る」「切る」「終わる」「買う」順で出現され、「変化」を表す動詞、「移動」を表す動詞、「実現」を表す動詞が多く使われている。今回の調査から、「ついに」「とうとう」と共起する動詞において、大きな差はないことが分かった。

表(3) 共起する動詞述語

	ついに(は)			とうとう		
	動詞	頻度	比率	動詞	頻度	比率
1	なる	104	6.4%	なる	21	7.4%
2	来る	33	2.0%	来る	12	4.2%
3	超える	24	1.5%	やる	9	3.2%
4	する	23	1.4%	出る	8	2.8%
5	出る	21	1.3%	切る	5	1.7%
6	実現する	19	1.2%	終わる	4	1.4%
7	至る	17	1.0%	買う	4	1.4%
8	果たす	15	0.9%	超える	4	1.4%
9	登場する	15	0.9%	出す	4	1.4%
10	入る	13	0.8%	起こす	3	1.0%

(比率は、頻度を総合計(「ついに」: 1624、「とうとう」: 284)で割った%)

#### 4-2. 「ついに」「とうとう」と共起する述語のテンス

李建華 (2000) は、「ついに」「とうとう」の共通点として、「述語のテンスは過去が多い」としている。しかし、「多い」という指摘の根拠が示されておらず、述語のテンスにおいて数値的な違いを示していない。

また、ルチラ (2005) は、「やっと」「ようやく」「ついに」「とうとう」の研究において、この四つの副詞は、「大体シタ形式の述語動詞と共起しながら、出来事の実現までの時間量を話し手にとって長く感じられるものとして描写する」と指摘し、研究の対象を「シタ形式の述語文に限定する」としている。しかし、下記のように、実際に現れる「ついに」「とうとう」と共起する述語のテンスは、非過去形もあるので、先行研究での考察の対象に漏れがあったのではないのかと思われる。

今回の調査結果をまとめたのが表(4)である。

表(4) 述語のテンス

	ついに		とうとう	
	頻度	比率	頻度	比率
過去	1000	60.9%	233	81.5%
非過去	642	39.1%	53	18.5%
合計	1642	100.0%	286	100.0%

表(4)の「過去」というのは、例(8)のように、過去形の形をしているもので、「非過去」というのは、例(9)(10)(11)のようなものを指す。

例(8) 田中氏もついに姿を見せなかつた。(95年2月15日)

例(9) だがついに、オランダでもユダヤ人絶滅のアウシュビッツ集団強制移送が始まる。(95年4月1日)

例(10) 苦しんでいる本人は「痛む」という訴えだけで適切な処置を望んでいるのだが、痛みのたびに看護婦が「どこがどう痛むか」と聞きに来るので、患者はとうとう感情を爆発させる。(96年8月6日)

例(11) 真心ブラザーズは8月19日、ついに武道館に登場する。(97年6月21日)

例(11)の場合、形式上は「非過去」であっても、「待ち望んでいたもの(真心ブラザーズが武道館に登場すること)がやっと実現した」という含意があるため、意味は「過去」のように考えられるが、本研究では「ついに」「とうとう」の述語との共起を、形式の面に注目した。そのため、例(11)は「非過去」として処理した。

李建華 (2000) の指摘のように、今回の調査結果でも「過去」が多かった。正確な

数値は、「ついに」が6割、「とうとう」が8割、過去形述語と共起していて、「とうとう」の方が「ついに」より2割程度、過去形述語と多く共起している。ここで注目したいのは、『毎日』での「ついに」「とうとう」の述語との共起において、例(9)(10)(11)のように、非過去形述語との共起も4割、2割程度の比率で現われたことである。

そして、例(12)のような、「名詞止め」の用法<sup>9</sup>で出現する場合、内容的には「ついに離婚訴訟した」と推測できるが、現れ方として述語が省略されているため、表(1)の「表示無」とした。

例(12) ペルー・フジモリ大統領とスサーナ夫人、ついに離婚訴訟(95年10月5日)  
ルチラ(2006)は、分析の対象を過去述語に絞っているが、今回の「ついに」「とうとう」の調査結果から、述語は「過去」のみではなく、「非過去」、そして、述語が省略されている形で現れることが分かって、先行研究での分析で、すべての「ついに」「とうとう」の出現傾向が検討されたとは言い切れないと思われる。

#### 4-3. 「ついに」「とうとう」と共起するアスペクト

本稿では、「狭義アスペクト」は検討せず、「広義アスペクト」<sup>10</sup>を検討し、「～してある」「～しておく」「～してしまう」「～しはじめる」「～しおわる」との共起関係について調査したが、「～してしまう」を除き、殆ど用例が現れなかった。

池田(2000)は、『芥川全集第一巻～十三巻、第十五巻』『アエラ(930525号)』『シナリオ「寅さん」シリーズ』をデータとして、「～てしまう」との共起関係を検討し、「ついに」8%、「とうとう」25%の比率を指摘し、「～てしまう」は、「とうとう」と共起しやすいとしている。しかし、三つのジャンルごとに数値の検討が出来ていないため、解釈しにくくなっている。石川(2006)は、「～てしまう」との共起は、「ついに」2.4%、「とうとう」8.1%であったとしている。「～しはじめる」の場合、「ついに」との共起が1.5%、「とうとう」との共起が19.5%、「～しおわる」の場合、「ついに」と

<sup>9</sup> 「名詞止め」の用法については、4-7で詳しく見る。

<sup>10</sup> 「アスペクト」は、出来事そのものの<時間的展開の違い>を表し、完成相「る/た」を使うと、出来事の時間関係が<継起>、継続相「ている/ていた」を使うと、<同時>である。これは<出来事の時間的展開の仕方の違い>であって、表現手段の中核(狭義のアスペクト)を示し、広義のアスペクトは、「シテアル、シテオク、シテシマウ、シハジメル、シオワル/シタコトガアル、スルコトガアル、シタバカリダなど/シバラク、キュウニ、トキドキなど」がある。(「アスペクト・テンス」『現代日本語必携』(工藤真由美 2000 : pp. 136-137))

の共起が1例、「とうとう」との共起が1例、あつたとしているものの、「メディアミックス」「新潮文庫」と性格の異なるデータを同一に扱っているため、ジャンルごとの詳細な数値が分かりにくくなっている。

今回の調査結果は、「～しておく」の場合、「ついに」との共起が1例、「～しはじめる」の場合、「とうとう」との共起が1例のみ見られた。そして、先行研究の指摘のように、「～てしまう」との共起が他のアスペクトと比べ、多く出現した。

表(5)は、「～てしまう」との共起をまとめたもので、出現した用例は、例(13)である。

表(5) 「～てしまう」との共起（「ちゃう」含む）

	ついに		とうとう	
	頻度	比率	頻度	比率
～てしまう	74	4.6%	37	13.0%
合計	1624	100.0%	284	100.0%

表(5)から「～てしまう」は、「ついに」より「とうとう」の方で約3倍程度多く出現している。比率の面から検討すると、池田(2000)と石川(2006)の研究結果の中間に位置している。先行研究は、データの多様性でジャンルごとの出現傾向が読み取りにくかったが、今回の調査結果から新聞というジャンルでの「とうとう」と「～てしまう」との共起が明らかになったと思われる。

例(13) とくに昨年六月以降ずっと四割を超え、七月の電話調査では、とうとう本社世論調査史上初の五割を超えてしまった。(95年1月20日)

#### 4-4. 「ついに」「とうとう」と共起するモダリティ

出来事の内容(命題)に関わる命題内副詞<sup>11</sup>である「時・アスペクトの副詞」は、話し手の主観を表す文法カテゴリーであるモダリティ<sup>12</sup>とどう関わっているのか、検討してみる。

調査結果を見ると、全体的に「ついに」の方が「とうとう」よりモダリティとの共

<sup>11</sup> 中右は、副詞を大別して、命題の一部を形造る「命題内副詞」と命題に対するモダリティを表明する「命題外副詞」に二分している。『日英語比較講座2文法』(中右実 1980 : p. 161)

<sup>12</sup> モダリティは、大きく対事的モダリティと対人的モダリティに分けられ、対事的モダリティは、出来事の内容に対する話し手の捉え方を表し、対人的モダリティは、聞き手に対する話し手の態度を表す。『新しい日本語学入門』(庵 功雄 2001 : p. 166)

起が多く現われた。対事的モダリティは、大きく「認識的モダリティ」「当為的モダリティ」と二分類できる。今回の調査の結果では、「当為的モダリティ」より「認識的モダリティ」との共起が若干多かった。「認識的モダリティ」との共起において、「推量」の場合、「ついに」との共起が6例、「蓋然性判断」の場合、「ついに」との共起が2例、「徴候性判断」の場合、「ついに」との共起が7例、「とうとう」との共起が1例であった。「伝聞」の場合、「ついに」「とうとう」との共起が各1例で、「説明」の「わけだ」の場合、「ついに」との共起が3例であった。「説明」の「のだ」<sup>13</sup>の場合、「ついに」「とうとう」との共起において、用例の数が一番多かったため、下記の表(6)にまとめた。そして、「当為的モダリティ」との共起関係を見ると、「適当」の「べき」の場合、「ついに」との共起が2例、「必要」の「～ざるをえない」の場合、「ついに」との共起が2例であった。

大里(1986)は、例(14)を挙げ、「～だろう」と結び付いた表現が許されるのも「ついに」に限られるようである。「とうとう」はある事態(状態)へ向けての主体の意図的な「過程」が感知されない場合は使用されないのである(p.121)」と指摘している。

例(14) このような合同体は、論争を繰り返した挙げ句、ついに崩壊してしまうであらう。  
(大里 1986、下線部は筆者)

今回の調査結果も大里(1986)の指摘のように、「だろう」との共起が「ついに」のみ4例あったものの、「推量」を表す表現において、「だろう」だけに限らず、「～と思う」の場合も、「ついに」のみに限られて現れた。そして、「蓋然性判断」と「当為的モダリティ」の表現が許されているのも、「ついに」のみであった。この点を指摘している先行研究はない。

表(6)「のだ」との共起(「んだ」を含む)

	ついに		とうとう	
	頻度	比率	頻度	比率
のだ	72	4.4%	12	4.2%
合計	1624	100.0%	284	100.0%

先行研究で、「のだ」との共起を言及しているのは、石川(2006)のみである。石川(2006)は、「のだ」を「「事態の説明をやや詠嘆的に言い表す」連語の「ノダ(ンダ)がついた形」だとし、間投法として用い、「のだ」の出現について調査をした。その結果、「ついに」の総用例530例の中、「のだ」との共起はなく、「とうとう」のみ、例(14)

<sup>13</sup> 本稿では、「のだ」の意味・用法については触れない。

のような用例が3例、現れたとしている。

例(15) 中川にとって、パンダが日本にやって来るという事態は予想外ではなかった。[中略]「とうとう来るんだね」(『プロジェクトX』第3巻)(石川 2006)

本稿の調査結果は、石井(2006)の結果とは数値的に若干異なる傾向を見せている。それは、表(6)の「のだ」との共起は「とうとう」のみではなく、「ついに」との共起においてもある程度あったということである。実際の用例は、例(16)(17)で、数値の面で、「ついに」と「とうとう」との間に大きな差は見えなかったがことも一つの特徴であると思われる。この点においても先行研究での指摘は見当たらない。

例(16) その後実験を積み重ね、今年三月二日、ついに「トップ発見」を発表したのだ。(95年3月30日)

例(17) いつかはやると思っていたが、その時がとうとう来たのだ。(96月4月26日)

#### 4-5. 終助詞・間投助詞との関係

終助詞・間投助詞<sup>14</sup>との関係を検討するのは、「ついに」「とうとう」と共起する終助詞・間投助詞が、モダリティとの共起の延長線であると思われるからである。これまでの先行研究で、終助詞・間投助詞との関係を検討しているのは、石川(2006)のみで、感慨の「か(な)」との共起において、「ついに」は3例、「とうとう」は2例、そして、強意の「ぞ(ぜ)」との共起においては、「ついに」「とうとう」、それぞれ1例があったとしている。

今回の調査で現われた終助詞・間投助詞は、「ね」「よ」「ぞ」「わ」「ぜ」であって、出現の数は大きくなかった。「ね」の場合、「ついに」との共起が3例、「とうとう」との共起は5例あって、「よ」の場合、「とうとう」のみ、1例あった。「ぞ」の場合、「つ

<sup>14</sup> 間投助詞は、助詞の一種。文の中で、どこに使われるかの制限が少なく、語句の切れ目であれば自由に使うことのできる助詞で語調を整えたり、語勢を強めたり、感動を表したり、聞き手に同意を求めたりなど、話し手の心情だけを表す働きをする助詞で、その働きの上からも、また、文の中のどこにでも使われるという使い方からも分かるように、それがなければ文が成り立たないということはないといった、比較的重要な働きをするのではない助詞。(省略)学説によって多少の出入りはあるが、古語は「ゑ」「い」、現代語では「さ」「ね」「よ」「な」の各語の挙げられることが多い。(補説)間投助詞は感動助詞・詠嘆助詞などの名称で呼ばれることもある。また、特にこの分類項目を設けず、終助詞の中に入れる考えもある。(『日本語文法大辞典』2001:p.184)

いに」のみ3例、「わ」の場合、「とうとう」のみ、2例あった。「ぜ」は「ついに」のみ、1例あった。実際の用例は、下記の例(18) (19) (20) (21) (22)である。

例(18) それにしても羽田美智子さんみたいな素人っぽい素材にとことんこだわり続けて、ついに一人前の女優に育てましたね。(96年12月19日)

例(19) ニコニコしながら手ぶらで帰ってきた夫は「とうとう買ったよ、ワイドにした」と言うのです。(97年5月25日)

例(20) 「やったあ、ついに行けるぞ」。(97年2月2日)

例(21) 「やったのう。とうとうオランダまで敵に回してしまうたわ」。(97年2月16日)

例(22) 論議なき土壌と君はなげくけど、東京の目黒区美術館の「1953年 ライアップ」展をめぐって、ついに新美術新聞紙上で論戦が始まったぜ。(96年12月16日)

「新聞」というジャンルでは、「終助詞・間投助詞」の出現は少なく、出現のあった箇所は、「会話文」の方に限られているのが特徴である。

「モダリティ」「終助詞・間投助詞」との共起を全体的に検討すると、「対事的モダリティ」との共起において、「とうとう」より「ついに」との共起が若干多く、「対人的モダリティ」との共起においては、「ついに」と「とうとう」との間に、大きな数値的な差はないことが分かった。

#### 4-6. 「会話文」「地の文」での出現傾向

表(7)は、「会話文」「地の文」での出現をまとめたものである。

表(7) 「会話文」「地の文」での出現

	ついに		とうとう	
	頻度	比率	頻度	比率
会話文	89	4.7%	35	11.5%
地の文	1810	95.3%	269	88.5%
合計	1899	100.0%	304	100.0%

本稿で「会話文」としたのは、例(23)のように、前後の文脈から話し手の発話だと見なしたものと、例(24)のような「演説」、そして、「独白文」を「会話文」として認めた。また、例(25)のように、「会話文」と「地の文」が混雑している場合、「ついに」「とうとう」が「会話文」の中に現れた時のみ、「会話文」として数えた。

例(23) 「とうとう (強制捜査が) 入りましたね」「そうですね」。原告団長と、

遺族の一人があいさつ代わりにこの日の強制捜査を口にした。

(96年 8月 22日)

例(24) 李総統は大学構内での歓迎式典で演説し、「長い上り道だったが、眺めは千金に値する。二十七年を経て、ついにここイサカに戻ってきた」と、母校再訪の感慨を表現。「決意と忍耐をもってすれば、人は夢を実現できるというのが私の固い信念だ」と述べた。(95年 6月 10日)

例(25) 「もの心ついた時から、自分は足が速い男だと思い続けてきたが、ついにそう思えない時がやってきました」と、引退を決断した理由を話した。

(96年 1月 26日)

山本(2007)は、『山本五十六(上)(下)』を資料にし、「ついに」「とうとう」の出現を検討し、「会話文内」に現れるものと、「会話文に關与」しているものと、二つの項目で検討している。「会話文内」での「ついに」の出現は、総用例17例の内1例、「とうとう」の出現は、総用例16の中、5例、「会話文に關与」での「ついに」は、総用例17例の中1例、「とうとう」は、総16例の中3例が出たとしている。しかし、山本の問題点は、調査したデータの数が少なすぎることで、例(26)のように「ついに」の出現が「会話文」の外にあるものを「会話文に關与」として数えたことであろう。

例(26) 東条内閣の海相になった嶋田繁太郎は、自身の地位を脅かされるのを嫌ってか、「今、聯合艦隊の長官には、山本以外に人が無い」の一点張りで、ついに承知しなかった。(下p12) (山本 2007)

石川(2006)は、「ついに」が3.3%、「とうとう」が21.7%の割合で「会話文」が現れ、「ついに」より「とうとう」の方が「会話文」での出現が多かったと指摘している。

今回の調査結果でも、先行研究の指摘のように、「ついに」より「とうとう」が「会話文」での出現が多かった。比率から先行研究と比べると、「ついに」の場合、若干多く、「とうとう」の場合は約半分の数値で現われた。調査前の予想としては、『毎日』の方が、先行研究の結果より、「会話文」での「ついに」「とうとう」の出現が少ないのではないかと考えられたが、『毎日』での「会話文」における「ついに」の出現は、他のジャンル(小説とメディアミックス)より若干高かった。

また、下記の表(8)(9)(10)(11)は、「会話文」と「地の文」、二つに分けて「ついに」「とうとう」の出現結果をまとめたものである。

表(8)「会話」と「地の文」での述語の有無

	「会話文」				「地の文」			
	ついに		とうとう		ついに		とうとう	
	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率
表示有	72	80.9%	29	82.9%	1570	86.7%	257	95.5%
表示無	17	19.1%	6	17.1%	240	13.3%	12	4.5%
合計	89	100.0%	35	100.0%	1810	100.0%	269	100.0%

表(9)「会話」と「地の文」での述語の種類

	「会話文」				「地の文」			
	ついに		とうとう		ついに		とうとう	
	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率
動詞	71	98.6%	28	96.6%	1553	98.9%	256	99.6%
名詞+だ	1	1.4%	1	3.4%	17	1.1%	1	0.4%
合計	72	100.0%	29	100.0%	1570	100.0%	257	100.0%

表(10)「会話」と「地の文」での述語のテンス

	「会話文」				「地の文」			
	ついに		とうとう		ついに		とうとう	
	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率	頻度	比率
過去	46	63.9%	24	82.8%	954	60.8%	209	81.3%
非過去	26	36.1%	5	17.2%	616	39.2%	48	18.7%
合計	72	100.0%	29	100.0%	1570	100.0%	257	100.0%

表(11)「会話文」と「地の文」での動詞述語

	「会話文」						「地の文」					
	ついに			とうとう			ついに			とうとう		
	動詞	頻度	比率	動詞	頻度	比率	動詞	頻度	比率	動詞	頻度	比率
1	来る	6	8.5%	やる	5	17.9%	なる	113	7.4%	なる	21	7.4%
2	なる	6	8.5%	来る	3	10.7%	来る	28	1.8%	来る	12	4.3%
3	やる	3	4.2%	出る	3	10.7%	する	26	1.7%	やる	12	4.3%
4	決断する	2	2.8%	買う	2	7.1%	超える	22	1.4%	出る	8	2.8%
5	超える	2	2.8%	落ちる	1	3.6%	出る	20	1.3%	切る	5	1.8%

(上位5位まで表示。5位以下は省略)

表(8)は「述語の有無」を、表(9)は「述語の種類」を、表(10)は「述語のテンス」を、表(11)は「動詞述語」を表している。表(8)から、「会話文」の方が「地の文」より、名詞止めの用法など、述語が省略している形、「表示無」が若干多く現われており、表(9)「述語の種類」から、「会話文」と「地の文」で「ついに」「とうとう」の出現がほぼ同じであった。表(10)の「述語の表示」と表(11)の「述語の種類」において、「会話文」「地の文」での「ついに」「とうとう」の出現傾向の差はあまりなかった。

表(10)の「述語のテンス」において、上記の表(4)、「会話文」と「地の文」を分けて、全体的に調査した「述語のテンス」と、比較してみると、大きな出現上の傾向は現れなかった。「会話文」と「地の文」と分けて検討するものと、分けて検討したものの出現率に、大きな差はないということが今回の調査で分かった。

#### 4-7. 「名詞止め」の用法について

上記の表(1)での「表示無」というのは、述語が「動詞」「名詞+だ」以外の、例(27)のような「単独で使われる文」、例(28)のように、「名詞止め」の用法で現れる文、例(29)(30)のように、述語が省略されている文などが入っている。

例(27) 「カギ握る男、ついに」 (95年4月20日)

例(28) 1人はついに未発見。 (95年1月24日)

例(29) 八九年以来のレイオフ(一時帰休)の累計が年末までに、ついに三百万人の大台を突破。 (96年1月9日)

例(30) 「とうとう私もあの病気に……」 (95年7月5日)

ルチラ(2005)は、例(31)を挙げながら、次のように述べている。「この用法の「ついに」は、「ついに実現」のように出来事名詞を修飾し、名詞の指し示す出来事が実現したことを表すことができる。この場合、出来事名詞が以前から話し手の心理的目標であった出来事を表す。「ついに実現!」「ついにスタート!」「ついに登場!」「ついに解明!」「ついにゴール!」「ついに発表!」「ついに完成!」などであり、名詞止めの形式を取る。この用法は(新聞)広告などで多く見られる。なお、結末としての目標達成そのものを強調しない「とうとう」は名詞止めの用法で用いられない」としている。

例(31) 「ついに一ドル相場実現…」(風) (ルチラ 2005)

ルチラの指摘のように、『毎日』においても、「ついに」の「名詞止め」の用法は多かった。しかし、「とうとう」の「名詞止め」の用法がないとは言い切れない。実際、

下記の例(32)(33)のように、「とうとう」が「名詞止め」の形式を取る用例があったからである。

名詞止めの用法の出現は、「ついに」の場合、「表示無」の用例257の中、132例(51.4%)が、「とうとう」の場合、「表示無」の用例18の中、8例(44.4%)であった。「ついに」のみ、「名詞止め」が多く用いられているというのは、『毎日』においては、該当されない指摘でと思われる。

例(32) 「それが次々とイメージがふくらんで」とうとう三十九回連載。

(95年5月4日)

例(33) ベテラン畠山の今季初アーチで、八回にとうとう同点。(97年9月28日)

また、「名詞止め」の用法が現れる文において、修飾される名詞について見てみると、「栄冠、完成、勝ち、脚光、金、結婚、登場」のようなプラス意味より、「引退、落ち、限界、死者、辞任表明、逮捕、ダウン、脱落、転落、廃止、敗北、離婚」などのマイナス意味の名詞が多く使われていることが分かった。ルチラの指摘のように、話し手の心理目標というプラス意味で使われることもあるが、「新聞」からはマイナス意味で使われているものも無視できないことが今回の調査で分かった。

## 5. まとめ

本稿では、類義語である「ついに」「とうとう」の相違を明らかにするため、これまでの先行研究で取り扱われていなかった「新聞」というジャンルを用いて構文的な観点から量的な検討を行った。先行研究では「ついに」「とうとう」と共起する述語のテンスは、形式上、「過去形が多い」と言われてきたが、今回の調査では、「非過去形」が「ついに」の場合4割程度、「とうとう」の場合2割程度の頻度で現われたことである。先行研究のように共起するテンスを「過去形」に限定すると、「ついに」では4割、「とうとう」では2割が検討の対象から除かれる結果となる。

共起する述語についての検討では、述語が表示される場合、「動詞」のみではなく、数値的には非常に低いものの、「名詞+だ」とも共起することが分かった。

共起する動詞の種類においては、「ついに」「とうとう」との出現傾向はほぼ同じで、「変化」「移動」「実現」を表す動詞との共起が多く見られた。特に、「なる」との共起が一番多く出現した。述語が表示されていない場合、先行研究での指摘と異なって「ついに」のみではなく、「とうとう」においても、名詞止めの用法で現われる文が出現していることが分かった。

アスペクトとの共起は、先行研究の指摘のように、「～てしまう」を除き、他のアス

ペクトの表現は低い出現を見せた。しかし、「～てしまう」との共起において、「とうとう」の方が、「ついに」より、約3割程度高く、先行研究で取り扱った他のジャンル（小説、シナリオなど）の結果とやや異なる傾向を見せた。

モダリティとの共起において、「当為的モダリティ」より「認識的モダリティ」の方が、若干数が多く、「とうとう」より「ついに」との共起が多かった。特に、先行研究で「だろう」との共起は「ついに」のみであると指摘されているが、「～と思う」の場合も、「ついに」だけに限られている。そして、「蓋然性判断」と「当為的モダリティ」の表現が許されているのも、「ついに」のみであることが今回の調査で分かった。また、モダリティとの共起において、数値的に目立っている項目は「のだ」であって、先行研究では出現していなかった「ついに」との共起が、「とうとう」との共起の数値と、ほぼ同じであったことも、注目すべき点だと思われる。

モダリティの機能を有する終助詞・間投助詞において、「ね」「よ」「ぞ」「わ」「ぜ」の出現が見られた。「対事的モダリティ」の場合、「ついに」の方が若干多く現れたが、終助詞・間投助詞においては、「ついに」「とうとう」との差はあまりなかった。

「会話文」においては、先行研究の指摘のように、「とうとう」との共起が多かったが、数量的には先行研究の数より少なかった。そして、「会話文」と「地の文」、二つに分けて「ついに」「とうとう」の出現を検討した結果と、「会話文」と「地の文」を分けずに検討した全体の出現傾向との間に、数値的に、差はあまりないことが分かった。

名詞止めの用法で現れている文において、「ついに」のみ出現するという先行研究の指摘とは異なって、「とうとう」との共起もあることが今回の調査結果で分かった。そして、名詞止めの用法において、出現する「名詞」は、先行研究の指摘とは異なって「プラス意味」より「マイナス意味」が多いことが今回の調査で分かった。

## 6. 問題点と今後の課題

伊藤（2004）は、新聞のデータについて、「日本語の文書としては、かなり特殊部類に入る。その原因は、かぎられた紙面に多くの情報をつめこもうとする、凝縮的な文章が主流だからである。」と述べており、「a. ワン・センテンスの平均の長さが他の日本語の文章のものよりもかなり長い。b. 臨時一語が多い。（例；親子関係不存在認知取り消し要求）c. 事実だけを伝える傾向がつよいので、センテンスの骨格となる名詞と動詞が多い。その一方、形容詞や副詞のような修飾成分は少ない。」（伊藤 2004）ことを、「新聞」の特殊性としている。このように、『毎日』データから「ついに」「とう

とう」の含まれている用例を分析したことで、この類義語の構文的な特徴がすべて明らかになったとは言えないが、今回の調査結果は、新聞データにおける「ついに」「とうとう」の特徴を示すものと考えられる。

今回、検討の項目として視野に入れなかった記事別での「ついに」「とうとう」の使い方は今後の課題としたい。それは、新聞の場合、「スポーツ」「家庭」「経済」「芸能」「国際」「社会」「社説」などの記事別に分けられ、その記事の内容と書き方によって、「ついに」「とうとう」の選択に影響が現れる可能性があるからである。しかし、記事別の検討で「ついに」「とうとう」の傾向が分かったとしても、それが新聞全体の傾向だとは言いきれない。それは、著作権の問題が済んでいない「読者の投稿」欄と「広告」欄はデータの中に含まれていないからであり、また、今回使用した『毎日』データは、他の新聞データと異なる傾向を見せている可能性もあるからである。それは、「新聞」というものは、編集者の立場によってある事柄についての解釈が異なる可能性があり、言葉の選択にも影響が生じるからである。

そして、意味的な分析を残しているので、今後、明らかにしたい。

#### <参考文献>

- 李 英児 (2006) 「時の副詞「やっと」・「ようやく」の意味・用法」『国文論藻』No. 5 京都女子大学
- 庵 功雄 (2001) 『新しい日本語入門』スリーエーネットワーク
- 池田英喜 (2000) 「「ツイニ・トウトウ」小考」『留学生センター紀要』新潟大学留学生センター 第2号
- 石川 潔 (2006) 『副詞「ついに・とうとう・ようやく・やっと」の意味と用法』桜美林大学2005年度修士学位論文
- 伊藤雅光 (2004) 『計量言語学入門』大修館書店
- 大里奉弘 (1986) 「ヤット・ヨウヤク・ツイニ・トウトウ」『九大言語学研究室報告』7号
- 工藤 浩 (1985) 「日本語の文の時間表現」『言語生活』通号403 筑摩書房
- 工藤真由美 (2000) 「アスペクト・テンス」『別冊国文学現代日本語必携』NO. 53
- 後藤 斉 (2003) 「言語理論と言語資料—コーパスとコーパス以外のデータ—」『日本語学』VOL 22
- 小矢野哲夫 (1982) 「副詞の意味記述について—方法と実際—」『日本語・日本文化』11号 大阪外国語大学留学生別科

- 中右 実 (1980) 「文副詞の比較」『日英語比較講座 2 巻 文法』大修館書店
- 長嶋善郎 (1982) 「ヤット・ヨウヤク・ツイニ・トウトウ」『ことばの意味 3 辞書に書いてないこと』国広哲弥 編 平凡社
- 仁田義雄 (2002) 『副詞的表現の諸相』くろしお出版
- 山本雅子 (2007) 「副詞表現の認知的意味機能「もう」「まだ」「ついに」「とうとう」」『言語と文化』No. 16(通 43) 愛知大学語学教育研究室
- 李 建華 (2000) 「副詞「ついに」「とうとう」「やっと」「ようやく」の異同について」『茨城キリスト教大学紀要』No. 34
- 森山卓郎・仁田義雄・工藤 浩 (2000) 『モダリティ』岩波書店
- 劉 笑明・吉田則夫 (2006) 「情意表現における副詞の働きについて」『岡山大学教育学部研究集録』第 131 号 岡山大学教育学部
- ルチラ パリハワダナ (2005) 「長時間経過の末の予見の実現を表す副詞「やっと」「ようやく」「ついに」「とうとう」について」『金沢大学留学生センター紀要』第 8 号 金沢大学留学生センター

<参考事典>

- 日本語教育学会 (2005) 『新版日本語教育事典』大修館書店
- 飛田良文・浅田秀子 編 (1984) 『現代副詞用法辞典』東京堂出版
- 高見澤孟 監修 (2004) 『新・はじめての日本語教育基本用語辞典』アスク
- 山口明徳・秋本守英 編 (2001) 『日本語文法大辞典』明治書院

(ちよ うによん・首都大学東京大学院生)